

私のネクストステージ

—退職者への質問状—

Vol.51



50代から準備を進め、定年後、 中小企業診断士として独立開業

元会社員

星野 裕司さん (66歳) 2017年定年退職

【ほしの・ゆうじ】1957年、東京都出身。明治大学商学部卒業。学生時代バンドのギタリストとして活動するほど音楽が好きだったことから、卒業後は日本楽器製造株式会社（現ヤマハ株式会社）に入社。56歳で中小企業診断士登録し、在職中より準備を始める。60歳で定年退職後、城南コンサルティング株式会社代表取締役社長として中小企業の事業支援を行う他、コンサル塾や独自の講座で次世代育成にも力を入れている。



—星野さんは総合楽器メーカーのヤマハ株式会社を定年退職後、中小企業診断士として独立開業されていますが、ライフプランは何歳の時から考えていたのですか。

最初に考えたのは40歳を過ぎた頃です。営業部にいた時、楽器店の経営者と話をする中で相談相手がいなくて大変だなと感じていたことと、広報部にいた時、会社の経営に興味をもつようになったことから、中小企業診断士を目指すことにしました。

ただ、資格取得の勉強を始めて間もなく、多忙な部署へ異動になり、やむなく中断、勉強を再開したのは50代になってからです。定年が現実として目の前に迫る中で、やはり資格取得しておこうと。ちょうど単身赴任になって時間に余裕ができ、再び楽器店とのお取引が深まったこともあり、試験に再チャレンジしようと決めました。

—中小企業診断士の試験は難しいと聞きますが、どのように勉強されたのでしょうか？

選択式の一次試験、記述式と面接による二次試験があるのですが、いずれも受検者の20%程度しか合格しませんから、単純計算で約4%の合格率になります。独学だと何をどう勉強すればいいかわからないし、仕事との両立でペースをつかめないため、休日や平日夜を利用して資格取得の学校に通ったり、通信教育を受けたりしながら学びました。

合格できたのは56歳の時で、当初は「独立開業の準備は定年後に始めればいい」と

呑気に構えていました。独立開業について学ぶコンサル塾に入ったとは言え、まだ自分事としての意識はありませんでした。

そんな私を本気にしてくれたのが塾長の言葉です。「会社員の時は会社の名前で仕事をしているが、独立開業したら自分の名前だけで仕事を取っていかねばならない。60歳で新人の中小企業診断士に仕事があると思うか？」と言われて、「確かにそうだな」と。そこから定年までの4年間、独立開業に向け少しずつ準備を始めることにしました。

—具体的に、どんな準備をされたのですか。

まずは会社に副業を認めてくれるようかけ合いました。当時はまだ副業へのハードルが高く、社内でも前例は無かったのですが、何とかOKをもらうことができました。

そこで個人事業主として屋号を持ち、コンサル塾の先輩たちのやり方を見よう見まねで仕事を始めましたが、平日は会社員としての仕事があるため思い通りにはできません。単発で商工会議所や金融機関から紹介を受け、中小企業の困り事の相談に乗ったりしながら、経験を積んでいました。

しばらくすると、社内で中小企業診断士の資格が生かせるようになりました。私は営業部門で管理職をしていたのですが、同じチームの営業担当者を通じて取引先企業にアドバイスをすると、目に見えて取引先企業の売上が上がり、他のチームからもアドバイスを求められるようになったのです。



「中小企業診断士の資格取得の勉強は人事、財務、法律、経営施策など幅広く学べますよ」と星野さん

——会社にとってもメリットがあったのですね。

実際、中小企業診断士の有資格者には企業内で活躍する人も多いんです。独立開業する有資格者は30%くらいだと思います。私の場合、「中小企業診断士にはこういうことができますよ」と会社に対し自分ができることをアピールして、活躍の場を広げていきました。「社外から見ると」という新たな視点を持ち、視野が広がったことで、自分の中での会社の見方も変わりました。

今振り返ってみても、独立開業する前に副業として中小企業診断士の経験を積めたことは、とても良かったと思います。と言うのも、会社員として収入を確保しながらだと、気持ちに余裕があるから、いろんなことに挑戦できたのです。定年後、収入が無い状況だと、そうはいかないでしょう。おかげで、定年から独立開業までの大きなキャリアアチェンジも、スムーズにできました。

——やりがいを感じるのとはどんな時ですか。

経営者とは孤独なものです。経営上「本当にこれでいいのだろうか？」と迷うことがあっても、社内の人間にはなかなか相談できないものです。社外の税理士や公認会計士は身近な相談相手ですが、会計上の利益や決算書など数字の相談はできても、どうやって売上を伸ばしたり、社員をマネジメントしていくかという未来に向けた相談は難しい。会社をどの方向にもっていきたいか話を聞き、現状を分析しながら、未来に向

けた具体的な相談に専門家として乗れるのが中小企業診断士です。アドバイスしたことで会社の業績が改善したり、経営がうまくいって「ありがとうございます」と感謝されると、やりがいを感じます。

——中小企業診断士に必要な能力は何だとお考えですか。

専門家としての知識と経験があることを大前提に、人間力が必要だと思います。その点では、定年後の独立開業であっても、遅くはありません。

高齢化社会の中で、中小企業の経営者の年齢も上がっています。多くの経験を積んできた経営者たちの悩みを深く理解し、共感をもって相談相手になるには人生経験が必要です。若い中小企業診断士は最新のデジタル分野は得意かもしれないけれども、人生経験においては中高年のほうが有利です。それまでの人生経験に加えコミュニケーション能力があれば、最大の強みにできるでしょう。

——星野さんは何歳まで続けるつもりですか。

「定年の無い仕事をしたい」というのが、独立開業した理由の一つですから、お役に立てる限り続けていきたいと思っています。中小企業診断士の中には80代の大先輩もいらっしやいますから、まだまだです。

——今後やりたいことは何ですか。

中小企業診断士としての仕事と並行して、次世代の中小企業診断士を育てていく

ことです。私は定年前に学んだコンサル塾で現在、塾長を務めていますし、自分自身でも後進育成の講座をもっています。

中小企業診断士の仕事について、右も左もわからなかった頃、塾長のカバン持ちをしたり、ボランティアスタッフとして手伝いながら教えてもらったさまざまなことは、独立開業後、大いに役立っています。その恩を先輩に返すことはできませんから、「だったら、次世代に伝えていくことで、恩返しをしよう」と。言わば、「恩送り」です。中小企業診断士は不足していますが、だからと言って人数さえ増やせばいいというものではありません。講座や塾を通じて、質の高い人材を育成する一端を担っていきたいと思っています。

——最後に、30代〜50代の読者へ向けてメッセージをお願いします。

「目の前の仕事をおろそかにせず、しっかりと取り組んでおいたほうがいい」ということです。私は中小企業診断士の勉強をしていた時、「あいつは勉強しているから、仕事の手を抜いている」と絶対言われたくないと、勤務時間中はそれまで以上に成果を出そうと仕事に励みました。そうすることで仕事の効率が上がったり、周囲の状況がよく見えるようになり、それが後々振り返ってみると役に立っていると感じます。ですから、自分が置かれた状況でできることを、最大限にやっておくことをお勧めします。